

原 著

# システムの変革を担うソーシャルワークの 理論的枠組みへの考察 —マイクロからマクロレベルの連動性と ストレンクス視点の結びつきに着目して—

直 島 克 樹\*<sup>1</sup>

## 要 約

本研究は、ソーシャルワークにおけるマイクロ・メゾ・マクロレベルの連動性に着目し、その研究の動向を整理すると共に、ソーシャルワークが働きかけるシステムの変革を説明する上で必要となる理論的枠組みを検討することによって、以下の点を明らかにした。第一に、個別支援と地域支援を一体的に展開することを目指すコミュニティソーシャルワークや地域を基盤としたソーシャルワークの検討から、ソーシャルワークがマイクロ・メゾ・マクロレベルの連動性に基づくという共通基盤を持つこと、また、それがジェネラリスト・ソーシャルワークの視座と、地域福祉の推進という展開とも結びつくことが示唆された。第二に、ソーシャルワークにおけるマイクロからマクロレベルの実践は単に連動するだけでなく、流動的かつ同時的に展開され、さらにその展開にあたっては、メゾレベルでの実践が基盤となってくることが明らかとなった。第三に、ソーシャルワークは生活システムにおいて、マイクロからマクロレベルでの実践を展開してその生活システムの変革を目指す、その時に必要となる枠組みとして、複雑系の科学に基づいた、システムのゆらぎの増幅に基づいた変革が位置づけられることが導かれた。そして第四に、ソーシャルワークが重視するエンパワメントの先行研究から、生活システムの変化を促進する源となるのがストレンクス視点であることが明らかとなった。ソーシャルワークが働きかけるシステムのゆらぎの創出と増幅において、ストレンクス視点が重要な役割を果たすことが理論的に示唆された。これにより、システムの変革を前提とするソーシャルワークの理論的枠組みの試論を展開することができ、今後の実証的研究の基盤が構築された。

### 1. はじめに

2020年以降、新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、日本社会の持つ様々な不平等や抑圧の構造が浮き彫りにされたのではないだろうか。仕事を失う人々、学びを奪われる子どもたち、DVや虐待など生命の危機にさらされる人々の困難さなどは、決してその人個人のレベルに起因するものではない。誰にでも起こり得るその困難な状況が、社会全体の構造との結びつきや仕組みそのものから生じているという視点を、多くの人々の記憶に刻むことになったのではなかろうか。

そのような状況の中で、ソーシャルワークが果たすべき役割は決して小さいものではない。2014年に新たに採択されたソーシャルワークのグローバル定義からも明らかのように、社会変革や社会開発が第一に強調されている点は見逃せない。その特徴は、よりマクロレベルへの視点を意識した点にあり、上記で述べた社会構造から生じる困難さの解決を図ることは、ソーシャルワークのそもそもの使命とも考えられよう。

また、国は「地域共生社会」の実現に向けた取り組みを進める中で、社会福祉法第106条の4に示され

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 直島克樹 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail : k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp

ている、「重層的支援体制整備事業」を2021年4月より始めている。すなわち、これまでのような属性や世代別の支援体制ではなく関連事業の一体的な執行を可能とし、既存の社会資源を結びつけるなどの活用によって制度の狭間を埋め、さらには地域づくりに向けた支援も一体的に行うことを目指している。従来のような個別の相談支援体制の充実といったミクロの視点だけでなく、ネットワーク構築などのメゾレベルでの支援との連動を想定しており、より一層のソーシャルワークの活用が求められていると考えることが必要であろう。

以上のような状況がある一方で、ミクロからマクロに連動するソーシャルワークの理論的枠組みに関する検討が十分に行われてきたかと問えば、必ずしも十分であったとは言えない。高良<sup>1)</sup>も指摘しているように、日本で実践理論として発展してきている地域を基盤としたソーシャルワークも、コミュニティソーシャルワークの両者とも、ミクロからマクロレベルへとつなぐことの重要性を位置付けてはいる。しかし、そのミクロからマクロレベルに至るソーシャルワーク機能が、対象とする生活システムを、どのように変革していくのかといった理論的検討は少ない。

そこで本研究では、第一に、近年のソーシャルワークに関するミクロからマクロへの連動性に着目した研究に焦点を当て、そこで指摘されている点について整理していく。そして、第二に、ミクロからマクロレベルの連動性を特徴とするソーシャルワーク機能によって、生活システムの変革を実現していくことに寄与する具体的な視点と、その根拠になる理論的枠組みについて考察を試みていきたいと考えている。

## 2. コミュニティソーシャルワークと地域を基盤としたソーシャルワーク

### 2.1 コミュニティソーシャルワーク

この数十年、社会福祉全体を俯瞰的に捉えた時、その中心にあるのは地域福祉の推進であったことは間違いない。その地域福祉推進のための機能として注目されてきたのがコミュニティソーシャルワークであった。大橋<sup>2)</sup>は、コミュニティソーシャルワークは決して海外での提起のみによる導入ではなく、日本の中で、地域福祉が求められることによって生じてきたものであるとの理解が必要としている。

「コミュニティソーシャルワークとは、地域において個別支援と地域組織化を統合化させる実践<sup>2)</sup> (p.12) であり、「個別援助過程を重視しつつ、その支援方策遂行に必要なインフォーマルケア、ソー

シャルサポートネットワークの開発とコーディネート、並びに“ともに生きる”精神的環境醸成、福祉コミュニティづくり、生活環境の改善等を同時並行的かつ、統合的に推進していく活動及び機能がコミュニティソーシャルワーク<sup>2)</sup> (p.12) である。

大橋<sup>2)</sup>は、このコミュニティソーシャルワークの機能として、ニーズキャッチや個別相談などのミクロレベルから、ソーシャルサポートネットワークの組織化などのメゾレベル、再発予防や解決策のシステムづくりや地域福祉計画づくりのような政策領域に至るマクロレベルまでを位置づけており<sup>†1)</sup>、これらが切り離されることなく統合的に展開されることがコミュニティソーシャルワークとして重要となると考えている。

井上と川崎<sup>3)</sup>は、このコミュニティソーシャルワークと地域包括ケアシステムについて考察を行う中で、「地域自立生活を支えるケアは地域を基盤として包括的・継続的なケアのシステムが求められるのであり、安心、安全で暮らしやすく、相互に支えあう地域づくり（地域支援）と個人の生活を支える医療、保健、福祉、その他の生活に関連する社会資源をトータルに活用して支援する（個別支援）という2つの側面から同時にアプローチしていくという、そこにコミュニティソーシャルワーク機能の存在意義がある」(p.10) と考えている。そして、介護保険制度の変化とケアマネジメントについて検討し、今後の地域包括ケアの推進について考察する中で、「地域包括ケアを実践していくための地域を基盤としたソーシャルワークは、ミクロ領域、メゾ領域、マクロ領域のソーシャルワークの連動性と循環性が求められる。それぞれの領域は別個の領域として実践活動されるものではない。ミクロ領域、メゾ領域、マクロ領域はそれぞれ交互、相互作用を持ちながら連動していくものである<sup>3)</sup> (p.17) と提起している。

森<sup>4)</sup>も、コミュニティソーシャルワークの特質について、「個別支援を主眼に置くジェネラリスト・ソーシャルワークと地域組織化を基本原理に持つCW（コミュニティワーク：筆者加筆）を統合的に展開する」(p.121) 点にあるとし、これまでの地域福祉の理論的取り組みも振り返ることによって、今後のコミュニティソーシャルワークが、メゾ領域やマクロ領域において、問題に対する予防的な側面を見出していくことに課題があると考えている。

加えて、コミュニティソーシャルワークが目指すコミュニティ像を検討した黒澤<sup>5)</sup>は、福祉コミュニティの形成こそがコミュニティソーシャルワークの中核であると考えている。ここで提起されている福祉コミュニティとは、世代を超えた地域住民を結

びつけることによって持続可能なサポート・ネットワークを生み出し、地域の公共性を創造していくものと考察している<sup>5)</sup>。地域の公共性を問い直していく点にコミュニティソーシャルワークを位置づけようと試みているとも言え、個別支援から地域づくりを一体的にとらえようとしていると理解することが出来る。

また、近年では内山<sup>6)</sup>が、コミュニティソーシャルワークと住民参加を検討する中で、「住民参加は住民自身、組織、そして地域のエンパワメントをもたらす一つの手段である」(p.145)とし、地域共生社会の実現のためのコミュニティソーシャルワークの役割について、「住民個人、組織、地域のエンパワメントに対し段階的な支援の実施することが必要であり、きっかけ作りから内発的発展に至るまでの一連の継続した働きかけとサポートは個人と地域を結びつけることを常に意識しながら行うことが求められる」(p.147)と考察している。そして、「ソーシャルクオリティ（社会的質）」という、経済的成長よりも、人々の様々なコミュニティへの参加を促進し、社会生活を豊かにしていくことを目指す考え方を枠組みとしていくことで、コミュニティソーシャルワークを個人と地域との相互作用による成熟化を図る、地域共生社会のまちづくりに欠かせないものと考えている。

以上のことから理解できるように、コミュニティソーシャルワークにおいては、個別支援と地域組織化や地域づくりまで含めた地域支援を統合的に位置付けようとする点に、一つの特徴を見出すことができる。また、コミュニティソーシャルワークが、孤立問題やひきこもり等、制度の狭間の問題と関連させられることも少なくないが、現状の制度的対応の限界を乗り越えようとする動きを、個別支援と同時に展開していく必要性を提起していることも見逃せない側面であろう<sup>7)</sup>。

## 2.2 地域を基盤としたソーシャルワーク

さて、上述したコミュニティソーシャルワークと並び、地域を基盤としたソーシャルワークという言葉でも、個別支援と地域支援の一体的展開が示されてきている。例えば岩間<sup>8)</sup>は、地域を基盤としたソーシャルワークという枠組みから、個と地域の一体的支援という表現を用いて説明することを試みている。岩間<sup>8)</sup>によれば、「地域を基盤としたソーシャルワークは、個を地域で支える援助と個を支える地域をつくる援助を一体的に推進し、その延長線上に地域福祉の進展を位置づける点に特徴がある」(p.6)とし、以下のように定義を試みている。

「地域を基盤としたソーシャルワークとは、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎理論とし、地域で展開する総合相談を実践概念とする、個を地域で支える援助と個を支える地域をつくる援助を一体的に推進することを基調とした実践理論の体系である。」<sup>8)</sup> (p.7)

地域を基盤としたソーシャルワークという実践理論においては、個々人を中核において、その個々の状況に応じて援助システムを展開し、そのシステムにインフォーマルも含めたサポートの参画を進めていくことを起点としている<sup>8)</sup>。すなわち、本人や家族等への直接的なミクロレベルでの働きかけのために、地域等のサポートを組織化するというメゾレベルでの取り組みを掛け合わせていくことである。「ネットワークによる連携と協働」が地域を基盤としたソーシャルワークの特質として挙げられている<sup>8)</sup>が、それはメゾレベルでの実践を通じ、ミクロレベルでの実践が変化していくことを示すことでもあろう。

また、地域を基盤としたソーシャルワークにおいては、「個別支援から当事者の声を代弁したソーシャルアクションへと展開していくことが重要な視点」<sup>8)</sup> (p.11) とあるように、ソーシャルワークのマクロレベルの取り組みでもある「ソーシャルアクション」がその機能として位置づけられている。地域を基盤としたソーシャルワークにおいては、当事者主体の原則に立って取り組むことで、そのことが地域を基盤としたソーシャルアクションに結び付いてくる<sup>9)</sup>。すなわち、当事者としての本人たちのニーズを地域へ代弁し、さらに地域の声をさらなる環境に伝えるという代弁機能を果たすことによって、そこでもたらされた変革を地域に還元することができる。そして、地域の気づきを代弁することも併せて行われることによって、地域のソーシャルアクションが図られることにも繋がるのである<sup>9)</sup>。

上述したコミュニティソーシャルワークとの明確な区別はされていないが、コミュニティソーシャルワークも地域を基盤としたソーシャルワークも、個別支援と地域支援とを一体的に実施するという点で、ミクロからマクロへの連動性を考えていこうとしていることは間違いない。「この2つの実践理論とも、地域という言葉を用いてはいるが、ミクロ（利用者）を起点として、ミクロを支えるためにメゾレベルがあり、それがより広範なマクロレベルへと展開するものと考えている点では、共通している」<sup>10)</sup> (p.27) と言えるであろう。

また、両者とも、「コミュニティ」ソーシャルワー

ク、「地域を基盤とした」ソーシャルワークという点から考えて、ミクロ領域においてもマクロ領域においても、その実践においては、メゾ領域が一つの媒介になることを位置づけているとも考えることができる<sup>†3)</sup>。実際、「小集団、団体、組織、地域住民、コミュニティなど、ミクロとマクロのリエゾンの位置にあるメゾレベルの関わりが重視されつつある」<sup>10)</sup>(p.29) 現状がある。いずれにしても、以上のことは、まさしくミクロからメゾ、そしてマクロへ、さらにマクロからメゾ、ミクロへと繋がる連動性を示す考えと言えるであろう。

### 2.3 ソーシャルワークにおけるミクロ・メゾ・マクロレベルへのアプローチ

さて、上述してきたようなソーシャルワークにおけるミクロからマクロまで含めたアプローチの提起は、現在におけるジェネラリスト・ソーシャルワークの流れとも言えよう。実際、地域を基盤としたソーシャルワークにおいては、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎理論としているのであり、ミクロからマクロレベルの連動性はソーシャルワークとしてあるための共通基盤であり、生命線と考えていかなければならない。

かつてパートレット (Bartlett, H)<sup>12)</sup>は、ソーシャルワークの共通基盤を示すことで、ケースワークやコミュニティワークといった専門分化している状況を克服することを試みた。彼女は、「ケースワーカー、グループワーカー、あるいはコミュニティ・オーガニゼーション・ワーカーとして教育を受けた実践者たちは、必然的に、自分たちの実行力 competence として、それぞれひとつの方法を提供していく立場におかれる。このことは、実践者たちが自分たちの提供する特定のサービスを利用できるような人びとを求めるという結果をもたらす」<sup>12)</sup>(p.38) とし、方法論による対象規定に異議を唱え、ソーシャルワーク全体に対して実行可能な理論構築を主張したのである。それは、その後のシステム論や生態学的視点を、ソーシャルワークに導入していくことへ繋がっていった。

ジェネラリスト・ソーシャルワークは方法論の統合の流れを受け継いでいる。このジェネラリストとしてのアプローチは、何か独自の視点や方法を提起しているわけではない。ジェネラリストとしてのアプローチは、「統合アプローチや生態学的アプローチが提示した、人と環境(諸システム)とのインターフェイス(接点)で生じている不調和の状態として把握される問題を、人の内的葛藤や不適切な対人関係・対処能力といった個人のパーソナリティ上の問題から、諸システムにおける資源不足、不適切な資

源提供方法、不適切な政策、といった諸システム上の諸問題まで、幅広く多角的に理解して把握するという視点と、その理解にもとづいて複合的な介入を実施する、というエコロジカル・システムティックな枠組みを引き継いだもの」<sup>13)</sup>(p.138) である。

実際、ジョンソン (Johnson, L.) とヤンカ (Yanca, S.)<sup>14)</sup>は、ジェネラリスト・アプローチとしてのソーシャルワーク実践の視座として、「関心を向ける単位には、個人、家族、小集団、機関または組織、地域、あるいはこれらのなかでの相互作用が含まれるように、ジェネラリスト・アプローチでは多様なシステムへの適応を可能にする知識が強調される」(p.1) としている。彼女らの視点は、例えば、支援の対象をマルチクライアントシステム、さらには、支援側をマルチパーソン援助システムといったように、様々なレベルのシステムを包括的に扱うことを求めており、現在ソーシャルワークで重視されている多職種連携や多機関連携といった支援のバックグラウンドになっている。

このように、コミュニティソーシャルワークや地域を基盤としたソーシャルワークで目指される個別支援と地域支援の統合は、ジェネラリスト・ソーシャルワークが示す包括的なシステム理解と結びつくことは間違いないであろう。一方で、個人への支援と地域づくりを簡単に結びつけてしまうことに警鐘を鳴らす意見もある。松端<sup>15)</sup>は、岡村理論やルーマンのシステム理論の枠組みから、個人への支援と地域づくりを安易に結びつけることには問題があると指摘している。すなわち、「困難な状況に置かれている個人を支援する上では、その人なりその家族や世帯を『支援できるか否か』ということこそが支援者に課せられた任務であり、地域づくりができるか否かは直接的には関係ない」<sup>15)</sup>(p.15) のであり、「地域づくりが課題になるとすれば、個別支援を実践するために地域にはたらきかけ、地域づくりの必要性が生じた場合であるが、その場合でも目的はあくまで個別支援のためにということであり、地域づくり自体が目的となるわけではない」<sup>15)</sup>(p.15) と考えている。

これに対し加藤<sup>16)</sup>は、コミュニティソーシャルワークにおける、個別支援と地域支援が統合的に提供されることの意義について、社会モデルの考え方を取り入れることで明らかにすることを試みている。そして、実際の支援事例を分析することで、「両者を統合することによって相互作用が生じ、個別支援を深化ならしめるだけでなく、地域支援もより推進できる」(p.58) と考察している。

個別支援と地域支援を統合的に捉えるか分化的に

捉えるかという、これらの意見は一見対立しているように見えるかもしれないが、必ずしもその理解は正しくないであろう。個別支援を担当する者が確かに地域づくりまでを目標にしないとしても、その向き合う課題自体が社会の構造上生み出されるものであるとすれば、一つのシステムとしてその結びつきを包括的に考える視点を持つことが必要なのである。すなわち、個別の課題解決が目的であったとしても、それは結果的に地域づくりなどの地域支援を伴い、様々な資源との結びつきや開発、そして、社会的な構造そのものへの働きかけへと連動する。そのことを一人でやるか、異なる者が連携してやるかは理論的にはどちらでも構わない。むしろ重要なことは、ソーシャルワークにおいて、ミクロ・メゾ・マクロレベルは連動するものとして実践が組み立てられる必要があることであり、その連動が、対象となるシステムをいかようにして変革していくのか、その変革に必要な視点は何かという点にあると考えなければならないであろう。

### 3. ミクロ・メゾ・マクロレベルの連動体としてのソーシャルワーク

#### 3.1 地域福祉の推進とミクロからマクロへの連動

かつて藏野と八重田<sup>17)</sup>は、日本でのソーシャルワーク理論について、「『ミクロとマクロ』、『直接と間接』の二領域、あるいは二次元の混乱問題がある」(p.235)ことを指摘した。そして、アメリカのソーシャルワークのソーシャルワーク概念を参照しつつ、日本の混乱状態について検討し、日本では「ミクロとマクロ」に関わる概念理解については大きな差異は見られないが、「直接と間接」という概念の理解については、2つの方向に分けられることを見出した。この2つの方向性とは、クライアントに直接働きかけるか、クライアントの環境に働きかけるかで直接と間接を区分する方向と、これまでのソーシャルワークの援助技術を直接援助と間接援助に区分した上で、そこにミクロとマクロを相当させて区分する方向性である<sup>17)</sup>。

すなわち、「『ミクロとマクロ』とはいずれも領域の違いを言うのであり、『直接と間接』についてはチェンジエージェント・システムとクライアント・システムが直接的に関わるか否か、あるいは間接的に関わるか否かという、近接関係を表現する考えであることに留意」<sup>17)</sup>(p.239)することが必要であると指摘しており、これら2つの概念は次元の異なる概念であることを示している。

確かに、日本のソーシャルワークにおいては、ミクロやマクロという捉え方とともに、直接的か間接

的かという2分法でも実践を説明してきた。また、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワーク、アドミニストレーション、ケアマネジメントやソーシャルアクションなど、それぞれの形態別にも説明がされてきた。一方で、近年の日本においては、地域福祉の推進という方向性の中で、ミクロからマクロへの領域に着目し、従来からのソーシャルワークの統合化への動きがより活発になってきているとも考えられる。

例えば、小沼<sup>18)</sup>は、こういった様々な捉え方が日本におけるソーシャルワークの定着に貢献したことを認めた上で、「今日的な地域福祉の推進方法として、地域の問題を発見し、解決・行動する主体である地域住民等が、“いかに活動しやすい環境を整えるか”という、従来のコミュニティワークのみに終始せず、ミクロ領域からメゾ領域、マクロ領域まで連続した体系として捉えた『ネットワークの構築』が現実的な課題であり、そのために、各種方法論の『統合化』が求められている」(p.2)と述べている。つまり、近年の地域福祉の推進が、直接的か間接的かという2分法、さらには形態別の説明を超えて、ソーシャルワークにおけるミクロ・メゾ・マクロレベルの連続性への関心を高め、方法論の統合化を進めていると整理しているのである。ソーシャルワークと地域福祉は、その実践的な理論的枠組みとしては、重なる部分が多いことが考えられるのである。

#### 3.2 実践レベルにおけるソーシャルワーク機能の流動性

近年のソーシャルワークにおけるミクロ・メゾ・マクロレベルを視野に入れた理論的枠組みへの検討として、石川<sup>10)</sup>は、ソーシャルワークの実践を、ミクロ・メゾ・マクロレベルの連続体システムとして捉えた枠組みへの考察を試みている。具体的に石川<sup>10)</sup>は、1970年代に Pincus, A. と Minahan, A. によって提唱された4つのシステムを援用し、その4つのシステムにおけるミクロ・メゾ・マクロレベルでの実践を表1のように検討している。

表1からも理解できるように、石川<sup>10)</sup>は、「4つのシステムにおいてそれぞれミクロ・メゾ・マクロ実践があり、ソーシャルワーカーは、それぞれの枠組みを意識化することにより、ミクロ・メゾ・マクロ実践において誰が誰を対象として、どのようにしてアプローチするのか、その実践内容が明確化され、実践を行うことができる」(p.35)と述べ、同時に、「ワーカー自身が実践の対象やその目的を明確化、意識化することが肝要なのであり、区別することが目的となつてはならない」(p.35)とも言及している。

また、ミクロ・メゾ・マクロの区分であるが、石

表1 4つのシステムからみた3つの実践レベル (出典：石川<sup>10)</sup>)

	マイクロレベル 利用者や個人	メゾレベル グループ、組織、地域社会	マクロレベル 制度・政策、社会意識
ワーカー・システム	ワーカー個人やワーカー仲間（個人レベルでの専門職知識や技術の向上など）	ワーカーが所属する組織、専門職団体等の働きかけ等（専門職による会議等を含む）	専門職団体のあり方、国家資格化、国際ソーシャルワーク等
クライアント・システム	利用者や家族へのアプローチ（従来のクライアントとその家族に対する支援、援助）	利用者の自助グループや同様の課題をもつ団体の組織化等	患者・利用者の全国団体の組織化等
ターゲット・システム	ターゲットとなる利用者以外の友人、知人、隣人、他専門職への働きかけ等	ターゲットとなるグループ、専門職団体や組織、地域の自治会等への働きかけ等	ターゲットとなる制度・政策、政党、専門職団体、国民の意識に働きかける等
アクション・システム	アクションを起こす利用者以外の友人、知人、近隣、他専門職への働きかけ等	アクションを起こすグループ、専門職団体や組織、地域社会への働きかけ等	アクションを起こす政党、専門職団体への働きかけ、国民の意識改革のためのSNSの利用等

川<sup>10)</sup>は、日米のソーシャルワーク教育の異なりにも触れながら、「特に、メゾ領域については、マイクロ、マクロの中間にあり、お互いに重なる部分があることから、明確に区別すること自体に無理がある」(p.35)<sup>†4)</sup>と考えている。日本では、マイクロ・メゾ・マクロレベルは、ある程度区分できるものとして考えられているが、それが重なり合っているという点は重要であり、あくまでも実践において意識化する上での区分であることを理解しておかねばならない。

この重なりも前提としてソーシャルワークにおけるマイクロ・メゾ・マクロレベルを考えると、マイクロから積み上げてマクロへと至る運動性を考えやすいが、必ずしもそればかりではない。例えば、子どもの貧困問題への対応を例にして考えてみると、ソーシャルワーカーが地域や学校と結び付いていく連携をつくることによって、はじめて子どもの貧困問題の当事者が見え、そのことによってマイクロレベルでの取り組みにつながってくるといったことも考えられる<sup>19)</sup>。それは、マイクロ・メゾ・マクロレベルのソーシャルワークが、実践の中でどのレベルを起点としても他のレベルの実践に結びつき、それぞれのレベルでの実践が、同時に互いの実践を促進することを意味していると考えねばならないであろう。

### 3.3 ミクロ・メゾ・マクロレベルの一体的機能としてのソーシャルワーク

ここまで明らかにしてきたように、ソーシャルワークは、マイクロからマクロレベルへの運動性を意

味し、それぞれの機能レベルがつながっていくことで、対象とするシステムを変革していくことを目指すこととなる。地域福祉推進の中で個別支援と地域支援の一体的展開が求められているが、それはまさにソーシャルワークの実現が問われているとも考えられるのである。

さて、そういったソーシャルワークの実現が求められる日本において、近年社会福祉士の養成カリキュラムが改正され、ソーシャルワーク専門職教育においても、マイクロレベルからメゾレベル、そしてマクロレベルでの実践展開が求められ始めている<sup>20)</sup>。その中で公益社団法人日本社会福祉士会は、社会福祉士のソーシャルワーク機能<sup>†5)</sup>の発揮状況等についての調査を実施し、マイクロレベルやメゾレベルの機能に比べ、マクロレベルでの機能の発揮や、あるいは、その発揮の機会そのものが限定され、さらに知識や技術も十分ではないことを明らかにした<sup>20)</sup>。

加えて、この調査では、マクロレベルの機能を発揮する促進要因として、「専門職団体との関係性」、「自律性」、「ネットワーク」、「地域住民とのかかわり」、「ソーシャルワークに対する考え方」が重要であると指摘している<sup>20)</sup>(p.14)。これらは、“つながり”や“ジェネラリスト”としての機能の重要性を示しているとも言えよう。そして、各レベルにおけるソーシャルワーク機能の発揮においては、ソーシャルワーク専門職としての自律性や裁量権が重要だと

し、特に、メゾレベルでのソーシャルワーク機能を発揮する機会との関係において、革新性の高い職場環境との相関性があることを見出している<sup>20)</sup>。革新性の高い職場とは、様々な資源開発や制度への働きかけなど、マクロレベルの機能をも果たす場と考えられる。それゆえ、各レベルが連動していく実践がソーシャルワークであるのであれば、例えばネットワーク構築というメゾレベルの機能が、マクロレベルでの実践に繋がっていくことを促進しているとも考えなくてはならないであろう。

実際、メゾレベルとマクロレベルでの実践の重なりや同時進行性があるとも考えることも必要である。この同時進行性はメゾレベルとマイクロレベル、そして、マクロレベルとマイクロレベルでも生じる<sup>21)</sup>。例えば、NPO等に所属するソーシャルワーカーが、子どもの貧困支援において行政機関と連携することは珍しくない。そういった連携は、行政が制度や新たな実践の提案等も行うことにも結びつく。行政内部での検討が始まる動きが生み出され、既存の仕組みが変わり、当事者等に対する直接的な支援がより良く機能するようになることも考えられる。このことは、メゾレベルでのネットワーク形成が、マクロレベルでの取り組みとも一体的であることを意味しているし、マイクロレベルでの取り組みもより展開しやすくしていくことを意味している。すなわち、連携することなどのつながりの構築が重要であることを示していると言えよう。

ここまで明らかにしてきたソーシャルワーク機能の連動かつ流動性、そして同時進行性を表したのが図1である。図1では、マイクロレベルとマクロレベルがそれぞれメゾレベルに入れ込む形態となっている。

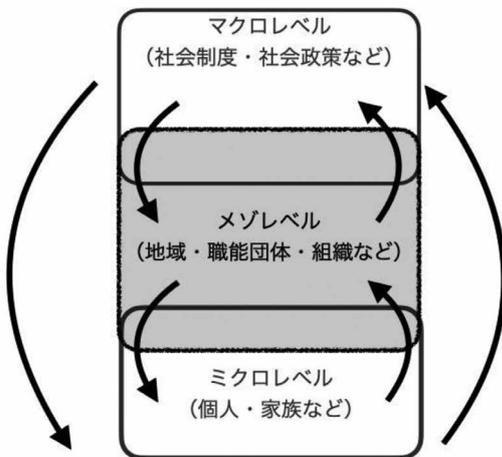


図1 ミクロ・メゾ・マクロレベルの一体的機能としてのソーシャルワーク (筆者作成)

る。これは、メゾレベルでのソーシャルワーク機能が、マイクロレベルとマクロレベルでのソーシャルワーク機能の発揮に重要な位置にあることを示しており、ソーシャルワークがネットワーク形成やそのつながりの拡大によって機能が高まっていくことを理解しなければならないのである。

#### 4. ソーシャルワークにおけるシステムの変革

##### 4.1 生活システムで展開されるソーシャルワーク

ここまで日本において展開されているコミュニティソーシャルワークや地域を基盤としたソーシャルワークの特徴を確認しながら、そのソーシャルワークが、マイクロ・メゾ・マクロレベルの実践機能を一体化した総称であると考えてきた。そして、そのマイクロレベルからマクロレベルまでのソーシャルワーク機能の連動性や流動性、同時性を指摘し、特にメゾレベルでの実践機能が、マイクロやマクロレベルの実践機能の発揮に重要な位置づけを持つことを明らかにしてきたのである。

ソーシャルワークは各レベルの機能を駆使し、対象となるシステムの変革を図ることで問題解決を図っていくものと考えれば、その向き合うべきシステムはどういったもので、さらに、どのような特徴があるかについて検討しておくことも必要であろう。すでに表1で示したように、石川<sup>10)</sup>は、Pincus, A.とMinahan, A.が示した4つのシステムを、ソーシャルワークが向き合うシステムとして考えている。実際、Pincus, A. & Minahan, A.<sup>22)</sup>は、ソーシャルワーカー、クライアントをそれぞれシステムとして捉え、問題解決のターゲットとなるシステム、さらには、問題解決のために協働するなどのアクションが展開されるシステムと整理することで、多次元でのシステムの力動を考慮した支援構造を描いていた。

しかしながら、そのシステムの力動がどういったものかといった理論的検討は行われていない。現実には、クライアント・システムとターゲット・システムは重なり合い、その重なり、ワーカー・システムとアクション・システムも重なり合ってくる。そもそも、人の生活というのはあらゆる側面を統合した全体性を持ったものであり、クライアントもワーカーも、働きかけるターゲットもアクションも、一つのシステムを成していると考えねばならない。その一つのシステムとしての生活が何らかの課題等を抱えているという認識が重要であり、その課題は、いわゆる「生活システム」が現在有するつながりとその相互作用から生み出されていると考えることができる。この課題を抱えた状態にある生活システム

を変革していくことが、ソーシャルワークの使命であると考えねばならないはずである。

ここでの生活システムとは、クライアントを含めた多様な結びつきという構造的かつ機能的側面だけでなく、結びつきが生み出す意味的側面まで視野に入れている。例えば、子どもは親とのつながりから友人、学校等社会的つながりが増え、さらには習い事や地域の関係者、社会制度などとの関係から生活が成り立っている。それは単純につながりがあるというだけでなく、同じ学校とのつながりにおいても、そのつながりが持つ意味は個々に異なっている。こういったつながりの総体が、不登校や虐待といった様々な事象を引き起こしている。これまでソーシャルワークは、エコマップという形でその人の生活に関する関係性を図式化してきたが、ここでの生活システムは、そのエコマップによって可視的に描かれるものでもある。

それゆえ、課題解決という目的のためには、そのシステムを複雑なまま理解し、むしろ、その生活システムの中でソーシャルワークの各レベルの機能が展開されると考えねばならない。ソーシャルワークの展開を通じて、Aという生活システムが、新たなつながりや意味を持ったA'生活システムへと変革され、生活上の課題解決が図られる。つまり、ソーシャルワークは、生活システムの中で展開され、

つながりや意味が変化した新たな生活システムを生み出していくのである(図2)。

#### 4.2 ソーシャルワークにおけるシステム変容理論の欠如

生活システムの中で、ソーシャルワークの各レベルでの実践機能が展開されることによって、システムそのものが変革されると本稿では考えていきたい。そのため、ソーシャルワークにおいて、歴史的にこのシステムという考えをどのように理解し、位置づけてきたかを改めて確認しておきたい。

例えば、高田<sup>23)</sup>は、「システム論の視点は、その学問としての体系化、認識すなわち問題の所在を明確にする診断の視点のみならず、実践すなわち援助のための視点、そのための科学的な方法を示唆する」(pp.58-59)と考えていた。また稲沢<sup>24)</sup>によれば、「社会福祉領域における原理研究に耐えうる基礎概念の一つが『システム』という概念」であり、そのシステムの概念は、「何かの本質や属性ではなく、認識論的な枠組み、すなわち『ものの見方』や『思考パターン』を表しており、対象化しうるものであれば、それらをすべてシステムとして記述することも可能であるため、社会福祉の基盤を記述する際にも有効なもの」(p.164)と指摘している。

実際、松井<sup>25)</sup>は、「1970年以降のソーシャル・ワーク理論の多くは、濃淡の差はあれ、システム理論の

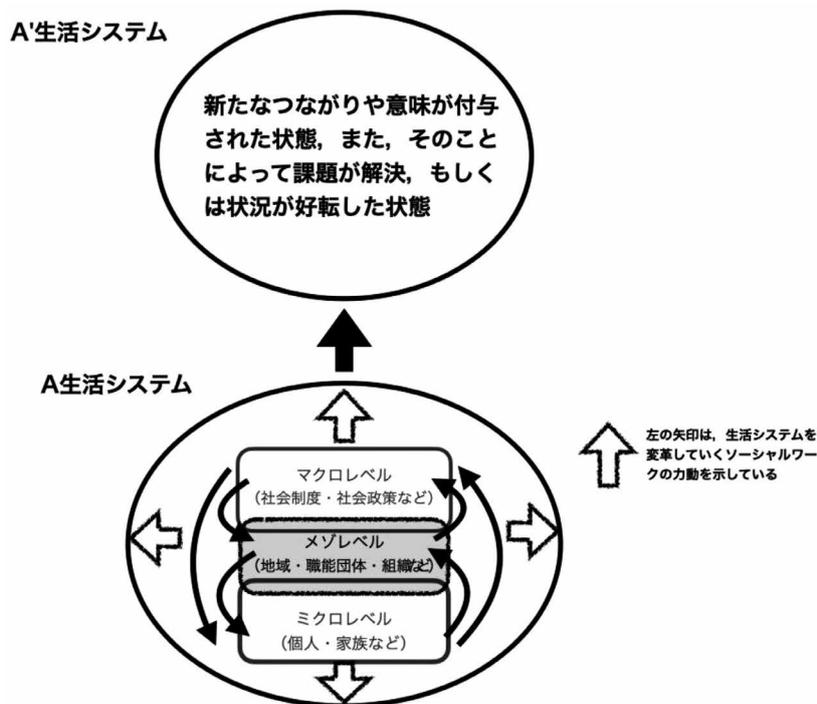


図2 生活システムを変革するソーシャルワーク (筆者作成)

影響を受けている」(p.12)とし、ソーシャルワークにおけるシステム理論の意義や課題について検討していた。そこでは、一般システム理論の特徴を明らかにする中で、システムとしての考え方が、人と環境とを切り離さないこと、システムの全体的過程を認識することなどをソーシャルワークにもたらしめたことを明らかにしていた。また、「システム理論の適用によって、ソーシャル・ワーク実践理論の枠組の中に、従来、看過されがちであった社会福祉諸施策およびその他の社会的諸資源をとりこみ、かつ重要な部分として位置づけることを可能」<sup>25)</sup>(p.13)としたこと、方法論の統合化を強く推進し、「さまざまな変数(内生変数、外生変数)の相互関連において分析することを可能にすることから、ソーシャル・ワーカーの介入もそれに応じて多様とならざるをえない」<sup>25)</sup>(p.13)状況をつくり出したことなどが革新的であったと考えていた<sup>†6)</sup>。

ただ、松井<sup>25)</sup>は、システム理論の適用における理論的課題点として、①人と環境システムとの間の関係が友好的であることが暗黙の前提にあること、②社会構造への視点や資源配分の不平等問題への分析が欠落していること、③システムの内部の過程の説明が不十分であることを、ピンカスやミナハン、ゴールドシュタインなどを批判する形で指摘していた。それゆえ、システム間の対立・緊張関係に基づく枠組みの検討、システム内部の情報処理が制御する資源処理に着目した介入の枠組みを今後の課題と考えていた。

こういった松井<sup>25)</sup>の指摘を踏まえ、クライアント等の生活システムを変化させる原理等が検討されたかといえ、必ずしもそうではなかった。システム論はその概念が機械的であり、抽象度も高いことなどが批判され、徐々にその影を潜めることになった<sup>27)</sup>。その一方で、生態学に基づいた人と環境との相互作用(インプットとアウトプット)から状態を焦点化する動きが活発化し、その生態学に基づいた実践モデルの開発や、エコシステムの導入が進められた。

それらの取り組みは意義あるものであることは間違いない(例えば、中村<sup>27)</sup>や平塚<sup>28)</sup>など)。実際、エコロジカルパースペクティブに基づくエコシステムは、上述したジェネラリスト・ソーシャルワークにおいても、5つの知識基盤の一つとして位置づけられている<sup>14)</sup>。ジョンソン(Johnson, L.)とヤンカ(Yanca, S.)<sup>14)</sup>は、「エコロジカルパースペクティブは、変化の過程における環境を内包し、人間の発達、人間の多様性、社会システム理論を包含する」ものであり、「エコシステムパースペク

ティブ(ecosystems perspective)はエコロジカルパースペクティブの一部を成し、取り巻く物理的環境を含めて環境の中の人のアプローチ(person-in-environment approach)におけるすべてのシステムを含むと考えている。このアプローチは、過去、現在、未来にわたってこれらのシステムにおける物、エネルギー、情報の交換について明らかにする」(pp.16-17)としており、人と環境、さらにはその相互作用の変化から、適合を目指す視点を重視しているのである。

ただ、視点や理論化が限界を確定することであるという点から、「生態学的及び生態—システム論的視点も、同様に、一般的なシステム概念に生態学的な限定を施したものである限り、何らかの領野を視野から排除してしまっている。たとえ、そのことが個別・具体的な実践場面では問題にならないとしても、原理研究にとっては軽視できない」<sup>24)</sup>(p.176)とし、「社会福祉の基礎理論として最も致命的なものは、『システム変容理論』と『社会理論』との欠落」<sup>24)</sup>(p.176)との指摘は、ミクロからマクロレベルまでのソーシャルワーク機能が、当事者の生活システムの変革に寄与すると考える点から無視できるものではない。

稲沢<sup>24)</sup>は、生態学的視点やエコシステムの問題点について、システムの変容に不可欠なポジティブ・フィードバックが位置付けられておらず、最も重要となる実践における働きかけによって、システムが変化するという意味が失われていることを明らかにしている。そして、その背景にあるのが社会理論の欠落であるとし、以下のように述べていた。

「社会および社会を生きる人間の概念規定は、当然のことながら生態系本来の使命ではない。生態学にせいぜいなしうるのは、有機体とそれを取り巻く自然・物理的環境との相互作用を記述することである。社会的環境と自然的環境とは、物理的境界を有するかどうかという点で決定的に異なっているのであり、自然的環境の素朴なアナロジーで社会的環境を把握することは不可能である。生態学に基づく視点は、社会の統一的な把握に際して、必然的に破綻をきたすと言わざるを得ない」<sup>24)</sup>(p.178)

すなわち、生態学やエコシステムの枠組みは、ソーシャルワークにおいて必要不可欠な社会との結びつきについて、自然環境的な解釈までが限界であり、社会変容に対する原理を描くことが難しいということである。確かに、生態学はあくまでも人間とそれ

を取り巻く自然環境との理論的枠組みであり、そもそもダーウィンの進化論的解釈に基づいている。進化論的解釈に従うならば、環境に適応できないものは、能力がないとみなされ、自然淘汰によって排除される存在でしかないということになる<sup>23)</sup>。そのため、自然淘汰に基づく進化的解釈にソーシャルワークを帰結するわけにはいかないということも考えなくてはならない。

それゆえ、マイクロ・メゾ・マクロレベルでのソーシャルワーク機能から、クライアントの生活システムの変革を描く原理として、生態学的視点では限界があると考えられる。すなわち、「社会的環境を統一的に把握することもできず、ましてその変容過程も記述できないまま、人と環境との適合をただ強調するということは、安易な統合を仮定した『保守的な立場』ではないだろうか。『支配的価値の是認』によって、現状維持的な社会統制に加担するだけではないのだろうか」<sup>24)</sup>(p.180)という稲沢の問題提起は今なお示唆的である。システム論から生態学への傾倒が、結果としてマイクロ・メゾ・マクロレベルでのソーシャルワーク機能が、生活システムを変革していく原理への検討を置き去りにしてしまうことへとつながったとも考えられ、以下ではシステムの変革を促進するソーシャルワークが持つべき枠組みについてさらに検討を行っていききたい。

#### 4.3 システムのゆらぎへの着目と基盤となる複雑系の科学

さて、ソーシャルワークが観点とする生活の特質は、部分と全体からなるシステムの特質である。例えば山崎<sup>25)</sup>は、ソーシャルワーク研究の立場から、ホリスティック(holistic)の概念に着目する必要性を指摘している。「科学においても、自分のテリトリーについてより細かく、より小さく知ることに埋没している限り、複雑系の課題を解き明かすことは難しくなり、学問的な発展性を見通せなくなるであろう」(p.3)とし、「ソーシャルワークにおいても、ホリスティックに考える必要が確かな流れとなったときの理論構成のあり方を、今の時代のうちに再検討すべきであろう」(p.3)としている<sup>†7)</sup>。それはすなわち、複雑なものを複雑なまま理解していく枠組みの必要性としても考えることができよう。

すでに述べてきたように、ソーシャルワークは歴史的にシステムとしての考え方、特に一般システム理論を導入してきた。一般システム理論は、物事を要素還元的に考える問題点を克服するために定式化されたものである。つまり、要素還元主義では、部分の総和は全体の性質と等しいと考えるが、一般システム理論では、必ずしもそうはなり得ないことを

主張する<sup>†8)</sup>。この一般システム理論は数学などとの関連性を持って議論されることも多いが、実際には特殊専門的に分割された科学を、システムの一般的な法則によって統合し、統合科学を位置づける試みである。そのため、自然科学や社会科学などの従来の垣根を超えて考えていく視点を提供しようとするものなのである。

この一般システム理論で体系化されたことは、各システムが、システムの入出力の流れのなかで、例えばシステムを維持するための秩序からのズレを意味する「ゆらぎ」を解消し、そこから自己維持を図る有機体ないし生命をモデルとする動的平衡システムである。動的平衡システムとは、常に他のシステムないし環境と相互作用を行うことによって、システムの安定を保っている開放性を持ったシステムのことである<sup>33)</sup>。

そのため、一般システム理論の特徴は、システムの安定(ホメオスタシス)を保つ制御の思想にあり、いわゆる負の(=ネガティブ)フィードバックを説明している点にあると考えねばならない<sup>33)</sup>。ここでのシステムとは一定の役割を果たすという目的をもったものであり、その目的とのズレ=ゆらぎが現実には生じることとなる。そのズレを極力小さくし、システムを目的の許容範囲内に収めるために機能するのが“負の(ネガティブ)フィードバック”である。その“負のフィードバック”とは、部分間のゆらぎを、全体の持つ秩序に収まるよう制御していくことを意味している。それゆえ、全体性が部分に対立的かつ従属的に捉え、管理・支配していく論理を生み出すと考えられよう。

マイクロレベルからマクロレベルのソーシャルワーク機能が介入する生活システムの構造は、そのつながりの機能、さらには、つながりの有する意味等が絡み合い、何らかの問題が生じている状況であると考えなければならない。既存のシステムのあり方が、困難な現在の状況をつくり出しているのであり、ソーシャルワークの各レベルの機能が、困難な現状を構成するシステムの変革に寄与していくことになる。すなわち、システムにゆらぎを起こし、システムの変革を促進していくということである。

このシステムの変革を考えていく上で、Campbell, S.<sup>34)</sup>が、カオス理論に着目したソーシャルワークの枠組みを検討している点は示唆的である。そもそもカオス理論は、20世紀の科学において、相対性理論と量子力学と並び、3大理論の一つと考えられている。Campbell, S.<sup>34)</sup>は、このカオス理論は、伝統的なシステム理論が言及してきたシステムの制御の枠組みを超えて、変化を志向するソーシャ

ルワークの新しい視点となりうることを主張している。すなわち、カオスに基づく考え方は、既存のシステムに生じるゆらぎの増幅こそが、そのシステムを変革していくという枠組みであり、さらに、ある事象 A が起これば B という事象が生じるという線形的思考を超えて、予測することが困難な非線形的思考の枠組みをソーシャルワークにもたらしめるのである。

実際、上述した先行研究からも明らかなように、システムの変革に必要なことは、システムに生じるゆらぎを制御していくことではなく、むしろ、そのゆらぎを増幅していく“正の（ポジティブ）フィードバック”であり、ソーシャルワークはそういったゆらぎを起こし、増幅させていく枠組みを持つことが必要であると考えなければならないであろう。

システムのゆらぎの増幅からの変革という考え方は、複雑系の科学として体系化されてきている。複雑系の科学とは、主に1990年代から台頭してきた一つの科学の潮流であり、16世紀から19世紀における決定論的な世界観とも、19世紀以降の確率論的な世界観とも異なる第3の科学とも考えられている<sup>35)</sup>。複雑系は、「単に多数の要素が不規則に相互作用し合っていることを意味するのではない」<sup>36)</sup> (p.179)。複雑系とは、「単純なシステムでも、ある種の予測を不可能にするような不安定状態を内在的に持っていること」<sup>37)</sup> (p.105) を本質的な前提とするものである。すなわち、「混沌からの秩序形成、秩序と混沌の相互浸透、秩序と混沌の入れ子関係という一見、パラドキシカルな状態こそが世界の本質であるとする背後仮説」を持ち、「世界は秩序と混沌の境を揺れ動く非定常系に他ならないとする科学観」<sup>37)</sup> (pp.102-103) を持っているのが複雑系の科学なのである。

複雑系の科学の最大のポイントは、カオスへの着目から、「カオスの縁」としての状態を定式化し、その「カオスの縁」からの秩序の生成を焦点化する点にある。「カオスの縁」とは、ホメオスタシス（定常状態・形態維持）の状態にあるのでもなく、かといってランダムな状態にあるのでもない、新しい変化への動きが起きる状態を意味している。つまり、「カオスの縁は、新たな情報創発や変異が活発に発生する領域、システムが励起（ハイな）状態にある場所、自己組織化のためのゆらぎが多発する領域」<sup>37)</sup> (p.105) を指している<sup>39)</sup>。システムは、様々な要素がそれぞれに関連し合い、ゆらぎを創出しながら、全体としての秩序を絶えずつくりなおし、その秩序がさらにシステムを形成する個々の部分を規定していくという相互連関・相互限定を特徴として

いる。それゆえ、ソーシャルワークは、生活システムの絶え間のない生成過程に関わるものと位置づけられるのである。

## 5. ゆらぎの増幅としてのストレングス視点

ここまで、マイクロ・メゾ・マクロレベルの機能の総体としてソーシャルワークを捉え、そのソーシャルワークが課題を抱えた生活システムにおいて、システムのゆらぎを形成し、増幅させることで、システムの変革を図っていくという枠組みを示してきた。残された課題は、このシステムのゆらぎを起こし、増幅させるためにソーシャルワークに求められる視点とは何かということである。上述したように、マイクロレベルからマクロレベルまでの連動性等を特徴とするソーシャルワークにとって、ネットワーク形成などのつながりや組織化といったメゾレベルでの機能が重要な位置付けとなる。以下では、ソーシャルワークがこれまで重要と位置づけてきたエンパワメント、さらには、その源泉であるストレングス視点に着目し、ソーシャルワークにおけるシステム変革の枠組みへの考察を深めていきたい。

### 5.1 エンパワメント志向のソーシャルワーク

デュボワ (Dubois, B.) とマイリー (Miley, K.)<sup>38)</sup> によれば、ソーシャルワークとは、「クライアントシステムをエンパワーし、その能力を強化し、社会構造を変革し、人の苦しみを癒し、社会問題を改善するもの」(p.4) である。そして、ソーシャルワークにとって重要なことは「変化の促進」であり、それは「他者と協働」することを意味すると位置づけている<sup>38)</sup>。そのことは、ソーシャルワーク専門職の主要な任務が、「権利を奪われ抑圧された人々と協働すること」(p.23)、「ソーシャルワーカーは変化のプロセスにおける責任あるパートナー」(p.63) ということでもある<sup>38)</sup>。

エンパワメントには、「認識という主観的要素と、社会構造の中におけるパワーの源という、より客観的な要素」があり、「個人的であると同時に政治的であり、自己変革という意味と抑圧の原因となる社会経済的ならびに政治的信条の改革という両方の意味を持つ」<sup>38)</sup> (p.29) という特徴がある。このエンパワメントに必要なことは、「資源を利用できること」であり、「人が自らの選択肢を知り、複数の選択肢の中から自らの行動を選択する機会を得られることが重要」<sup>38)</sup> (p.30) なのである。エンパワメントとは、「人が自らの人生に及ぼす影響力や統制力を増大させることを意味する」<sup>38)</sup> (p.30)。すなわち、個々は自らの生活システムを変革していく主体者であり、ソーシャルワークはその主体的変革を推進すると考

えていくことが求められるのである。

こういったエンパワメントを志向するソーシャルワークとは、「単なる問題への適応を目指すものではなく、システムの変革を要求するもの」<sup>38)</sup>(p.34)と位置づけられる。そして、そこでのソーシャルワーカーは、「ヒューマンシステムのストレングスを重視することで、個人と社会のコンピテンスを向上させる」<sup>38)</sup>(p.23)という役割を持つのである。特に、ストレンクスについては、ソーシャルワークとしての実践の根幹であり、課題を解決していくためのエネルギー源とも考えられている<sup>38)</sup>(p.14)。

また、こういった考えは日本でも同様である。エンパワメントについて、日本においても多くの先行研究が存在している（例えば、窪田<sup>39)</sup>、久保<sup>40)</sup>、渡辺<sup>41)</sup>、三毛<sup>42)</sup>、西梅<sup>43)</sup>など）が、それらを整理すると、エンパワメントの一つの特徴として、ストレンクスとしての考え方が内在していることを見出すことができる。ソーシャルワークはエンパワメントを推進していく責務を持っており、その鍵となるのがストレンクス視点と考えることが必要なのである。

## 5.2 ストレンクス視点によるシステムのゆらぎの増幅

上述したように、エンパワメントを志向すること

は、変化を促進することであるが、その基盤となると考えられるのがストレンクス視点である。そもそもストレンクス視点とは、歴史的にソーシャルワークが有してきた病理的視点への反省と、そこから生じるクライアントとワーカーとの関係の見直しなどの流れの上に成り立っており、人の誤りや人が直面する問題は認識するが、そのような苦しみと同様に、人の強さを認めるという、人の状況の理解に対するバランスを強化する試みでもある<sup>44)</sup>。それゆえ、それは決してトラウマや病気等を否定するものではないし、ソーシャルワークにおける既存の試みを否定するものでもない。主体的な変化の過程を排除する論理形成への警鐘でもある。

狭間<sup>45)</sup>は、ストレンクス視点における先行研究から、「ストレンクス視点は、人と環境間の適応ではなく、人と環境や社会資源とのつながりに焦点化した見方」(p.23)であることを見出している。そのことは、ストレンクス視点は、単なる「強さ」という曖昧なものではなく、その人の主観的な感覚も含めての意味を持った社会資源とのつながりへの焦点化とも考えることができるであろう。

実際、Miley, K. et al<sup>46)</sup>は、クライアントのストレンクスは、変化を目指した実践で用いる資源であ

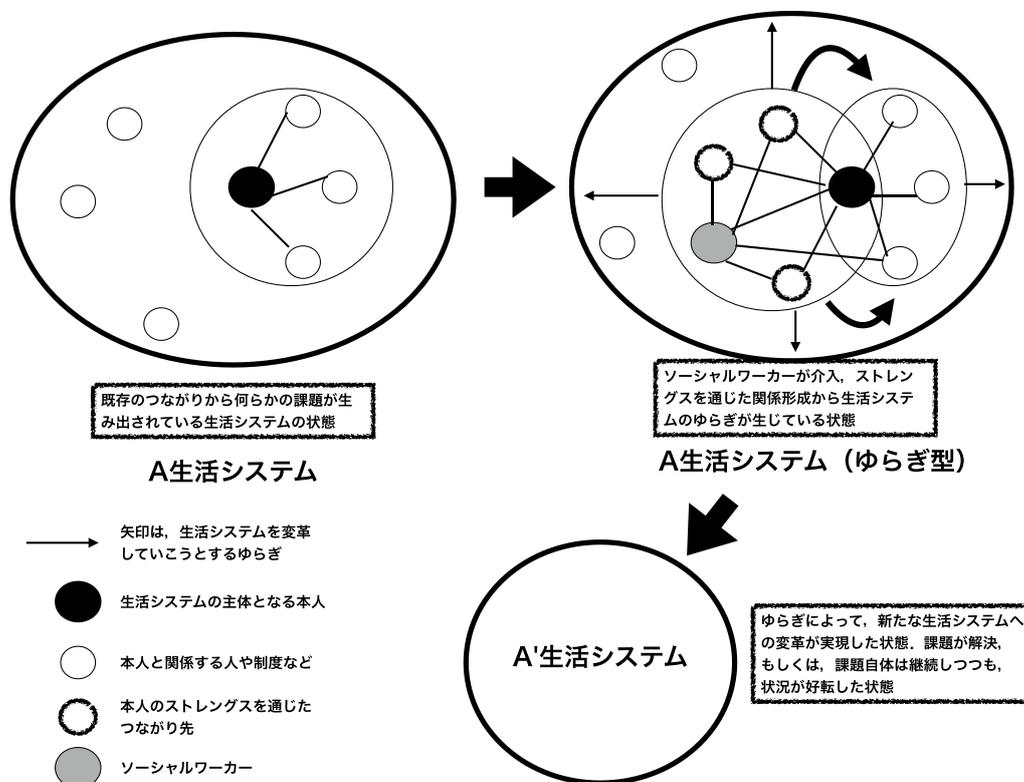


図3 ストレンクスからのゆらぎに基づく生活システム変革のイメージ図（筆者作成）

ると考えており、その資源とのつながりが生まれることがストレングスであると考えられるであろう。Miley, K. et al<sup>46)</sup>の考えで特に重要であることは、クライアントの有する環境には主観的もしくは客観的に社会資源が存在するという点でもある。それは、フォーマルとインフォーマルとのかの社会資源に関する規定に囚われる必要がないことを示している。また、クライアント同士のつながり、クライアントの身近な人たちなどとのつながり、ソーシャルワーカーを軸にした多様な専門家のつながり、専門機関同士のつながりなど、多様なアライアンスの構築が重要であり、その点にソーシャルワーカーの役割を位置づけていることは、まさしくメゾレベルとしての機能として、ストレングス視点が重要であることの証と考えることができるであろう。

フォーマルでもインフォーマルでも社会資源とつながることがストレングスであるとするならば、そのストレングスを契機として、ソーシャルワーク機能におけるネットワーク形成などのメゾレベルでの取り組みが活性化される。そして、そのことがソーシャルワーク機能におけるマイクロレベルやマクロレベルでの機能を活性化することによって、生活システム全体にこれまでなかった相互作用やつながりの意味が豊かになり、生活システムを構成する様々なつながりそのものがゆらぎとなって創出・増幅していく。その結果、システムが新たに形成し直され、課題解決が実現していくと考えられるのである（図3）。

このような枠組みに基づくとすれば、例えばソーシャルワーカーがクライアントと向き合ったとき、そのアセスメントにおいてストレングスをクライアントと探ることが第一の目標となる。そのストレングスは、もしかしたら福祉サービス機関になるかもしれない。あるいは、子ども食堂のような居場所や、趣味を通じたグループ等になるかもしれない。ストレングスとしてのつながりは、クライアントの有する属性や興味関心等に左右されることが多いが、こ

れまでになかったつながりが生まれることで、生活システムに新たな相互作用や意味が生まれ、システムのゆらぎとなっていくのである。ストレングスを契機とした多様なゆらぎが創出されることで、生活システムの変革へとつながっていくという、生活システムの変革を目指すソーシャルワークが位置付けられると考えられるのである。

## 6. おわりに

本稿では、ソーシャルワークとはマイクロ・メゾ・マクロレベルの機能の連動・循環体と捉え、そのソーシャルワークが課題となっている生活システムを変革していくことを示した。そして、そのシステムの変革を複雑系の科学に着目することによって、システムのゆらぎの増幅による変革を示し、その変革を実現するためのソーシャルワークの原理として、ストレングス視点が位置付けられることを明らかにしてきたのである。システムとしての考え方、ストレングスやエンパワメントがソーシャルワークにとって重要であることは疑う余地がないが、それらがどのようにして結びつくのか、その理論的な枠組みを示したことは一定の価値があると考えられる。また、ストレングス視点に基づいた社会的つながりの構築がシステムの変革の起点となっていくことを理論的にも示せたことは、ソーシャルワークの実践的側面においても意義があったと考えられる。

一方で、本研究はあくまでもこれまでの先行研究を踏まえた試論的なものであることは明らかである。今後は、本稿での考察も踏まえ、実際のマイクロからマクロレベルの取り組みによる課題解決、さらには、ストレングスに基づいた社会的つながりの構築という、メゾレベルを基点とした生活システムの変革についても、インタビュー等を用いて実証的に明らかにしていくことが必要であると考えられる。その点に対しては、今後の研究の課題としたい。

## 倫理的配慮

本研究は、文献研究に関し、先行業績としての他説と自説との峻別を明確にするようにし、日本社会福祉学会が定める「研究倫理規定」に基づき配慮した。

## 謝 辞

本研究はJSPS 科研費（研究課題番号:20K13749）「社会福祉とソーシャルワークの理論乖離の克服に関する研究」（研究代表者：直島克樹）の研究成果の一部です。

## 注

†1) 大橋<sup>2)</sup>はコミュニティソーシャルワークに求められる機能として、以下①～⑩の機能を位置づけている。すなわち、  
①ニーズキャッチ機能、②個別相談・家族全体への相談機能、③ICFの視点及び自己実現アセスメントシート及

- び健康生活支援ノート式アセスメントの視点を踏まえたケアマネジメントを基に、「求めと必要と合意」に基づく援助方針の立案及びケアプランの遂行，④ストレングスアプローチ，エンパワメントアプローチによる継続的対人援助を行うソーシャルワーク実践の機能，⑤インフォーマルケアの開発とその組織化機能，⑥個別援助に必要なソーシャルサポートネットワークの組織化と個別事例毎に必要なフォーマルサービスの担当者とインフォーマルケアサービス担当者との合同の個別ネットワーク会議の開催・運営機能，⑦サービスを利用している人々の組織化とピアカウンセリング活動促進機能，⑧個別問題に代表される地域問題の再発予防及び解決策のシステムづくり機能，⑨市町村の地域福祉実践に関するアドミニストレーション機能，⑩市町村における地域福祉計画づくり機能である。
- †2) この点に関連して，河合<sup>7)</sup>は、「制度の狭間，制度の限界から住民の主体的活動の意義はある．しかしそれを政府が法的に奨励することは問題が多い」(p.18)とし，コミュニティソーシャルワークにおける公私の役割分担を再考していく必要性を提起している．そして，地域には様々な格差や階層があり，「地域格差・階層格差を無視した『地域における住民主体の課題解決力強化』策は，有効性があるとはいえない」(p.18)とも述べ，その地域の現実に則したコミュニティソーシャルワークを構築していくことを求めている．
- †3) この点に関連し南<sup>11)</sup>は，滋賀県の縁(えにし)創造実践センターの組織間協働実践を調査することによって，ミクロレベルでの個別支援と，マクロレベルの開発的支援を接続する組織間協働等のメゾレベルでのソーシャルワーク機能の重要性を指摘している．
- †4) 石川<sup>10)</sup>は，全米ソーシャルワーカー協会(NASW)の倫理綱領では，ミクロソーシャルワークとマクロソーシャルワークとして考えられるのが一般的であり，メゾレベルはマクロレベルに含まれていると指摘している．
- †5) ここでは，ミクロレベルでのソーシャルワーク機能を，(1)側面的援助機能，(2)代弁機能，(3)直接支援機能，(4)教育・指導機能，(5)保護機能，(6)仲介機能，(7)調停機能，(8)ケア(ケース)マネジメント機能，メゾレベルのソーシャルワーク機能を，(9)管理・運営機能，(10)スーパービジョン機能，(11)ネットワークング(連携)機能，マクロソーシャルワーク機能を，(12)代弁・社会改革機能，(13)組織化機能，(14)調査・計画機能としている<sup>20)</sup>．
- †6) システム理論のソーシャルワーク統合化への貢献について，例えば秋山<sup>26)</sup>も，「統合ソーシャルワークモデルの出現に必須の役割を演じたのは一般システム理論であった」(p.7)とし，「パーソナリティを構成する内部要素から社会システムや社会制度を構成する要素の相互関連までを考慮に入れることが出来る，広範な視点」(p.7)と，「個人や集団の福祉状況をそれ自体の閉鎖性の中で捉えるのではなく，社会や環境と交互作用を持つ開かれた状態の中で捉えつつ，福祉の向上を促進させようとする観点を与えた」(p.7)ことが，その理由であると指摘している．
- †7) こういったことは，日本の社会福祉学においても歴史的に指摘されてきたことであるといえる．例えば，嶋田<sup>30)</sup>は，「個別科学への集中は，社会問題の一部を抽象し，他の諸要因を捨象する社会過程そのものを見誤らせしめる．人間生活と福祉に破壊的結果をもたらす」と考え，さらに嶋田<sup>31)</sup>は，社会福祉とは，唯一つの領域に還元する academic imperialism に収斂しないところに成立すると述べている．
- †8) ベルタランフィ(Bertalanffy, L.)<sup>32)</sup>によれば，「科学における分析的な手法の限界，つまりは研究すべきものにまず分解，しかるのち部品をいっしょに組み合わせて構成，あるいは再構成できるということへの限界から生まれている」(p.16)．
- †9) カオスの縁にあるシステムに対して，「ホメオカオス」という言葉が用いられている．それは「形態維持を意味するホメオスタシスとカオスを合成した言葉」<sup>37)</sup>(p.104)であり，形態維持の中に形態形成を取り入れた高次のホメオスタシス(定常状態)である．

#### 文 献

- 1) 高良麻子：日本におけるソーシャルアクションの実践モデル―「制度からの排除」への対処―．中央法規出版，東京，2017．
- 2) 大橋謙策：コミュニティソーシャルワークの機能と必要性．地域福祉研究，33，4-15，2005．
- 3) 井上孝徳，川崎順子：地域包括ケアシステムの構築を目指したソーシャルワークの実践的課題の一考察―ミクロ・メゾ・マクロ領域の連動性と循環性―．九州保健福祉大学研究紀要，12，9-19，2011．
- 4) 森明人：コミュニティソーシャルワークの特質と現代的意義―地域福祉の理論的系譜と概念構成の多角的検討―．東北福祉大学研究紀要，35，111-126，2011．
- 5) 黒澤祐介：コミュニティソーシャルワークにおけるコミュニティ概念．大谷学報，92(2)，21-33，2013．
- 6) 内山智尋：「地域共生社会」の実現とコミュニティソーシャルワークの役割．評論・社会科学，133，137-159，2020．

- 7) 河合克義：「我が事・丸ごと」地域共生社会とコミュニティソーシャルワーク。ソーシャルワーク研究, 44(1), 5-18, 2018.
- 8) 岩間伸之：地域を基盤としたソーシャルワークの特質と機能—個と地域の一体的支援の展開に向けて—。ソーシャルワーク研究, 37(1), 4-19, 2011.
- 9) 岩間伸之：生活困窮者支援制度とソーシャルアクションの接点—地域を基盤としたソーシャルアクションのプロセス—。ソーシャルワーク研究, 40(2), 5-15, 2014.
- 10) 石川久展：わが国におけるマイクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的枠組みに関する一考察—ピンカスとミナハンの4つのシステムを用いてのマイクロ・メゾ・マクロ実践モデルの体系化の試み—。Human Welfare, 11(1), 25-37, 2019.
- 11) 南友二郎：組織間協働のシステム形成に資するソーシャルワーク機能—滋賀の縁（えにし）創造実践センターを手がかりに。評論・社会科学, 120, 55-68, 2017.
- 12) Bartlett H: *The Common Base of Social Work Practice*. National Association of Social Workers, Inc, 1970. (ハリエット・パートレット著, 小松源助訳: 社会福祉実践の共通基盤. ミネルヴァ書房, 京都, 2009.)
- 13) 副田あけみ：ジェネラリストアプローチ。久保絃章, 副田あけみ編著, ソーシャルワークの実践モデル—心理社会的アプローチからナラティブまで—, 川島書店, 東京, 135-157, 2005.
- 14) Johnson L and Yanca S: *Social Work Practice - A Generalist Approach 7ed.*, Allyn & Bacon, 2001. (ルイズ・ジョンソン, ステファン・ヤンカ著, 山辺朗子, 岩間伸之訳: ジェネラリスト・ソーシャルワーク. ミネルヴァ書房, 京都, 2004.)
- 15) 松端克文：地域福祉推進における2つの支援機能—個別支援と地域支援に着目して—。桃山学院大学総合研究所紀要, 42(3), 1-27, 2017.
- 16) 加藤昭宏：コミュニティソーシャルワークにおける個別支援と地域支援の統合の可能性—二次障害による社会的孤立に対する社会モデルの援用—。日本の地域福祉, 32, 51-62, 2019.
- 17) 藏野ともみ, 八重田淳：ソーシャルワーク理論の概念構成に関する考察。社会福祉学, 39(1), 230-243, 1998.
- 18) 小沼春日：スクールソーシャルワーク実践におけるマイクロ・メゾ・マクロ領域の「つながり」に関する研究—地域福祉理論と方法論の枠組みからの考察—。藤女子大学人間生活学部紀要, 54, 1-13, 2017.
- 19) 直島克樹：地域における子ども支援拠点の開発とソーシャルワーク—子どもの貧困問題とマルチシステム・アプローチ—。熊谷忠和, 長崎和則, 竹中麻由美編著, 多面的視点からのソーシャルワークを考える—研究と実践をつなぐ新たな整理—, 晃洋書房, 京都, 126-135, 2016.
- 20) 竹田匡：序章。公益社団法人日本社会福祉士会編, マクロソーシャルワークの理論と実践—あたらしい一歩を踏み出すために—, 中央法規, 東京, 1-21, 2021.
- 21) 渡辺裕一：マクロソーシャルワークの射程と理論的枠組み。公益社団法人日本社会福祉士会編, マクロソーシャルワークの理論と実践—あたらしい一歩を踏み出すために—, 中央法規, 東京, 40-66, 2021.
- 22) Pincus A and Minahan A: *Social Work Practice: Model and Method*. F. E. Peacock Publishers, UK, 1973.
- 23) 高田真治：社会福祉計画論序説〔IV〕—対象構成：ソーシャル・ワークと一般システム理論—。関西学院大学社会学部紀要, 31, 57-67, 1975.
- 24) 稲沢公一：生態学的視点の理論的限界—社会福祉原理研究ノート〔I〕（論説）。社会福祉学, 33(2), 163-186, 1992.
- 25) 松井二郎：社会福祉とシステム論—米国ソーシャル・ワーク理論のわが国への導入をめぐる—。社会福祉研究, 20, 10-15, 1977.
- 26) 秋山薊二：ソーシャルワークの理論モデル再考—統合モデルの理論背景, 実践課程の特徴, 今後の課題—。ソーシャルワーク研究, 21(3), 4-14, 1995.
- 27) 中村佐織：ソーシャルワークの病理モデルからエコシステム・モデルへの移行—エコシステム支援過程の具体化を目指して—。ソーシャルワーク研究, 25(4), 271-279, 2000.
- 28) 平塚良子：生態学的アプローチのパラダイム分析と今後の展望。ソーシャルワーク研究, 21(3), 167-174, 1995.
- 29) 山崎美貴子：ソーシャルワーク研究の世界の新たな発見。ソーシャルワーク研究所監修, 北川清一, 佐藤豊道編, ソーシャルワークの研究—方法—実践の科学化と理論化を目指して—。相川書房, 1-14, 2010.
- 30) 嶋田啓一郎：社会福祉と社会体制—社会科学的方法論の探究—。人文学, 97, 1-31, 1967.
- 31) 嶋田啓一郎：社会福祉における構造=機能論的理解—孝橋正一教授の批判に答える。評論・社会科学, 7, 1-37, 1974.
- 32) Bertalanffy L. V: *General System Theory - Foundations, Development, Applications*. George Braziller, 1968. (フォ

- ン・ベルタランフィ著, 長野敬, 太田邦昌訳, 一般システム理論. みすず書房, 東京, 1973.)
- 33) Jantsch E : *The Self-Organizing Universe - Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution* (*Systems Science and World Order Library*. Innovations in Systems Science), Pergamon, 1980. (エリッヒ・ヤンツ著, 芹沢高志, 内田美恵訳: 自己組織化する宇宙—自然・生命・社会の創発的パラダイム—, 工作舎, 東京, 1986.)
  - 34) Campbell S. L : *Chaos Theory and Social Work Treatment*. Francis J. Turner edited, *Social Work Treatment*, Oxford University Press, UK, 48-57, 2011.
  - 35) 塩沢由典: 複雑系経済学入門. 生産性出版, 東京, 1997.
  - 36) 今田高俊: 複雑系の認識論的意義について. 統合学術国際研究所編, 複雑系, 諸学の統合を求めて, 晃洋書房, 京都, 177-187, 2005.
  - 37) 今田高俊: 第4章 複雑系の科学とポストモダン—21世紀社会への新しい視座. 統合学術国際研究所編, 文明の未来, その扉を開く—近代文明を超える新しい思考の原型 (モデル) を求めて—, 晃洋書房, 京都, 99-124, 2003.
  - 38) Dubois B and Miley K : *Social Work - An Empowering Profession, 8<sup>th</sup> Edition*, Pearson Education, Inc., 2014. (ブレンダ・デュボワ, カーラ・マイリー著, 北島英治監訳, 上田洋介訳: ソーシャルワーカー一人々をエンパワメントする専門職. 明石書店, 東京, 2017.)
  - 39) 窪田暁子: アルコール依存者の回復をエンパワメントの視点からみる. ソーシャルワーク研究, 21(3), 11-20, 1995.
  - 40) 久保美紀: ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討—Power との関連を中心に—. ソーシャルワーク研究, 21(2), 21-27, 1995.
  - 41) 渡辺洋一: エンパワメントを志向したソーシャルワークに関する一考察—社会福祉の固有性の視点から—. ソーシャルワーク研究, 21(2), 28-35, 1995.
  - 42) 三毛美予子: エンパワメントに基づくソーシャルワーク実践の検討. 関西学院大学社会学部紀要, 78, 169-185, 1997.
  - 43) 西梅幸治: ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践展開研究の意義. 福祉社会研究, 4・5, 53-67, 2004.
  - 44) Saleebey D : Introduction - Power in the People. Saleebey D, edited, *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Pearson Education, UK, 1-24, 2005.
  - 45) 狭間香代子: ソーシャルワーク実践における社会資源の創出—つなぐことの論理—. 関西大学出版会, 大阪, 2016.
  - 46) Miley K, O'Melia M and Dubois B : *Generalist Social Work Practice - An Empowering Approach 8<sup>th</sup> Edition*. Pearson, UK, 2017.

(2022年6月15日受理)

## Consideration of the Theoretical Framework of Social Work that is Responsible for System Transformation: Focusing on the Connection Between Micro-to-Macro Level Functioning and Strength Perspective

Katsuki NAOSHIMA

(Accepted Jun. 15, 2022)

**Key words** : social work, system theory, empowerment, strength perspective, fluctuation

### Abstract

This study focused on the micro-mezzo and macro-level linkage in social work, and clarified the following points by organizing research trends and examining the theoretical framework necessary to explain the systemic change that social work works for. We clarified the following points. First, from an examination of community social work and community-based social work that aims to develop individual and community support in an integrated manner, it is clear that social work has a common foundation that it is based on linkages at the micro, mezzo, and macro levels, and that this is the basis for the development of generalist social work. Second, we clarified that a function of mezzo level was important in the systematic change. Third, social work aims to transform living systems by developing micro- to macro-level practices in living systems, and the necessary framework for such transformation is based on the amplification of fluctuations in the system based on the science of complex systems. Fourth, previous research on empowerment, which social work emphasizes, revealed that the strength perspective is the source that facilitates change in living systems. Theory suggests that the strengths perspective plays an important role in the creation and amplification of systemic fluctuations that social work works with, and has laid the foundation for future empirical research.

Correspondence to : Katsuki NAOSHIMA

Department of Social Work  
Faculty of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp)  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.1, 2022 31 – 47)